

オウル地域職業学校 (OSAO) 訪問

東京教育専門学校 専任講師 吉田 梨乃

1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、研修4日目となる2025年9月11日午前に、視察先であるオウル地域職業学校（専修学校）(Oulun seudun ammattiopisto: 以下、OSAO)の技術部のキャンパスを訪問した。ここでの視察ポイントは、地域産業と連携した職業訓練を通じて即戦力となる人材を育成し、起業教育や国際スキル競技への参加、英語による職業資格プログラム等、グローバル対応力と職業的専門性を兼ね備えた教育である。

2 学校（施設）概要

OSAOは、2001年にいくつかの職業学校が統合される形で設立された職業訓練学校である。8つの異なるユニットからなり、北フィンランドでは最も大きな学校である。分野は、人文科学と芸術、農林業、ビジネスと管理、健康と福祉、テクノロジー、サービス産業、情報通信技術(ICT)と多岐にわたっている。



OSAO 入口にて

今回の視察では、OSAOのカウコヴァイニオ技術ユニットを訪れた。この技術ユニットでは、芸術とデザイン（木工と宝飾品）、ビルメンテナンス技術、清掃および不動産サービス、工事、電気工学と自動化技術、情報通信技術、実験技術、機械工学と生産技術、メディアとビジュアルコミュニケーション、プロセス産業、木材産業といった11コースがあり、それぞれの職業生活に基づいた教育と訓練が行われている。

このキャンパスには約2,000名の学生が在籍している。入学者の特性として、中学を卒業してからすぐに入学する者もいれば、働きながら学びに来る者もいる。また講師をはじめ、学生の学習をサポートするスタッフは180名が勤務している。視察した日は学生が休みの日であったため、静かな環境の中での視察となった。

ここで案内をしてくれたのは、校長のマルテ(Marhti Hautamaki)先生の他、オートメーションとロボティックの講師をしているヘイキ(Heikki Litendahi)先生、助手のアンナマリア(Anna-Mar Saarela)さんの3名である。マルテ校長は機械と生産部門の講師であり、ヘイキ先生は企業で経験を積んだのちに教員資格を取得し、教鞭をとるというキャリアの持ち主であった。アンナマリアさんは学生にサポートが必要な時に支援を行っている。

3 教育環境—「教え方」をアップデートする

フィンランドでは、2021年より義務教育期間が18歳までに引き上げられている。OSAOもこうした義務教育化を受けて、「教える」という概念をどのようにもつか、考え方をアップデートしたという。

(1) 学生が「何を身につけたか」を重視する学習環境

「ただ単位を取るだけではなく、どのような技術を習得したかが問われる。専門知識というのは、例えば仕事で習得しようが、学校で習得しようが、場所は関係ない」とヘイキ先生は語った。そして、「こういう概念、考え方方が重要である」と続ける。では、OSAOでは、学生はどのように学ぶのだろうか。

個々の学生は、日本のように学期で定められた期間で単位を取得するのではなく、自分のペースで単位を取得している。そのため、1年半で卒業する学生もいれば、5年をかけて卒業する学生もいる。卒業までの平均期間は約2年半¹である。こうした新しいカリキュラムが始まったことで、学生は「自分の課題」が明確になり、課題へのモチベーションも高まっていると教員も感じているようだ。

また10年ほど前から教授方法の変化も試みられている。それ以前の教授法は、講師がモデルを提示し、学生はそれを模倣するスタイルであった。現在、そういったスタイルの学びは一切行わず、教材から講師と学生が一緒に作っていく。それは学生自身が自律して学び、また個別性があるため、学生が個々に取り組めるような教材が求められているからである。こうした教授法によって、より支援が必要な学生に講師の時間を割くことができるようになっている。

学びのスタイルの変化は、講師の役目が「教える」立場から「コーチング」をする立場に変化しているとヘイキ先生は指摘した。例えば25名でワークショップを行う場合でも、学生は慌てることなく整然と静かに学ぶことができるという。ヘイキ先生によると、それは、自分のやることが理解できているからである。このように、学生が集中して課題に取り組める環境になったことにより、欠席する学生も減ったという。

つまり、講師が一方的に教材を与えたり、教え込んだりするような形ではなく、



オートメーションを学ぶ教室



学生一人ひとりの課題を管理

¹ 以前は、最低でも3年通学しなければならなかった。

学生一人ひとりが自律して学習できる教材と環境を整えることで、個別に最適な学習を保障しているといえるだろう。こうした環境下で、講師はコーチングのように、一人ひとりに寄り添った教育を行うことができるのではないか。

(2) フレキシブルに個別の支援を行う場—VARIKKO（ヴァリコ）

学生の中には個別に指導と支援が必要な者もいる。こうした学生への個別の指導を行う場所を VARIKKO（ヴァリコ）という。VARIKKO には、専門の講師²が常駐しており、16 時まで開室している。学生は時間割や授業の有無に限らず利用することができる。ここを利用するためには、例えば「学習が難しい」という場合には助手のアンナマリアさんに話し、サポートが必要と判断されれば VARIKKO へ行くことができる。学習面以外にも、家族のことや学校外で何か問題を抱えている場合も、必要に応じて個別の支援を行っている。

VARIKKO は常時、数名から十数名の学生が利用している。例えば、国語や数学に課題がある場合、VARIKKO でそれらの個別指導が行われる。情緒が不安定な場合は 1 日中 VARIKKO で過ごすこともある。学生のニーズによって、数時間で足りる場合もあれば、1 週間ほど VARIKKO で学習する必要がある場合もある。身体面での問題がある場合、VARIKKO と保健師で連携し、学生対応にあたる。科目講師が「この学生には支援が必要」と見なす場合、アンナマリアさんに相談し、VARIKKO で学生の様子を見ることがある。

このように、VARIKKO は多様な学生の必要に応じて利用できる仕組みがでできている。VARIKKO では何かを強制されることはない。18 歳までの義務教育が円滑に進むようにサポートする必要があれば、柔軟に VARIKKO という空間を利用できる。VARIKKO の利用においても、「時間」といった制約ではなく、学生が「何を身につけたか」に重きを置いているとヘイキ先生は語った。



VARIKKO 室内の様



個別に学習できる環境



安心できる環境が整っている

4 グローバルな人材の育成に向けて講師も学び続ける

OSAO は義務教育段階の学校ではあるが、すでに職業についている者も学びに

² 資格は教職とは異なり、学校アシスタントコースを修了した者で、学生を支援することに特化した職員である。ソーシャルワーカーや保健師、心理士とも異なる。

来ることがある。オートメーション技術の分野も日々進化しているため、男性に限らず、女性も就職後に新しい技術を学びに来ている。つまり、年齢の若い学生から、転職するために技術を学びに来た者、職場で必要な新しい技術を学ぶために来た者など、年齢も幅広く、目的の異なる学生が同じ環境で共に学んでいる。さらに、ポーランドやドイツからの留学生³も在籍しており、グローバルな学生の多様さは学校の特徴となっている。

研修団はヘイキ先生の講義室を紹介していただいた。この教室では新しい技術⁴が導入されており、リモートで講義を届けることが可能になっている。また、講師が操作した画面を翻訳し配信することも可能である。その他、音を吸収しやすく、光を遮断する効果がある赤いカーテンや学生が座る椅子も、学習に集中しやすい環境デザインになっている。ここでは6人から30人が作業可能である。前述したように、学生の教材は個々に作成しているため、8割ほどの学生は講師の手助けなく課題をクリアしているようだ。そのため、技術的に支援が必要な学生に時間を取ることができている。

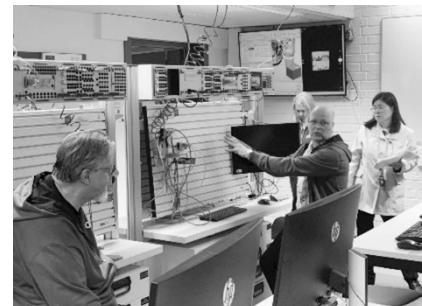
こうした設備の教室を扱うためには、安全面への管理が重要である。例えば、学生がロボットを自動で動かす場合には講師の許可が必要になる。全ての講師はこうした設備の使い方を習得しており、講師も新たな技術を常にアップデートしている。

講師は最新の技術と、学生との関わりから教育の効果を検討し、次の教育計画を立て、予算を申請している。講師同士は、フラットな同僚性を築いており、教育現場の、学生の変化に素早く対応することができるのが特徴である。

このようにあらゆる学生が常に新たな技術を習得できるようにするために、講師自身も、常に新たな技術を学ぶ必要がある。講師は、企業や大学、応用科学大学等と連携し、情報を集めている。講師は主に夜間に学んでいるが、その際は残業代が支払われる。また、このオートメーションの分野においては、EU諸国8か所とつながっており情報交換が行われる他、現在、5か国（ポルトガル、スペイン、エストニア、オランダ、フィンランド）で学習プログラムを作成しており、ヘイキ先生はロボット工学の接分野のコース開発を担っているため、今後、海外への出



ヘイキ先生の講義室



すぐに課題を実行できる設備

³ 英語の教材を準備しているため言葉の問題は特にない。

⁴ 現在新しいキャンパスが設置予定で、こういった設備はトライアルとして設置されているようだ。

張も予定されているという。こうした講師一人ひとりの専門性の高さも、グローバルな人材を育成する要因といえる。

5 おわりに

学校内の視察後、団長によるお礼の言葉と日本からのお土産をお渡しする時間が設けられた。その後は、別の建物に移動し、コーヒータイムが始まった。フィンランド滞在4日目、これまででも、どの視察先でもコーヒーと甘いものを用意していただき、視察団の一行もすっかりこの文化に慣れってきた様子である。こうしたリラックスした時間が教師の柔軟な考え方へ影響を与えていた。

今回の視察で、私は「多様な人々がいる中で、トラブルが起きないように、人との関わりで何か共有していることはあるのか」と質問した。これまで他の教育施設の視察を通じて、フィンランドでは教師も子どももその場にいる人が大事だと思うことをその場のルールとし、共有しているのが印象的であったからである。私が目にする日本の教育現場を思い返すと、自分たちでルールを決めるよりも形式的な評価に教師も子どもも悩まされたり、集団の同調圧力が強く働くことに苦痛を感じたりしている姿が目に浮かぶ。この違いは何だろうか。

質問に対して「学生とはオープンに話し合っている。講師と学生は同じレベル」という返答であった。そこには、一人ひとりへの理解について「みんな違う」という前提で向き合っており、何かに合わせなければならないという意識はない。

日本の考え方へ囚われると、フィンランドの教育は理解できないかもしれない。ヘイキ先生は何度も「時間は忘れてください」と言っていた。一方、日本では教育における時間（制限）の概念に強く縛られているのも事実だろう。例えば、学生の卒業のタイミングやどの課題をどの程度習得したかという判断も、本来一律に扱えないかもしれない。フィンランドの教育と対比して日本の教育を考えるとき、「学生にとってのウェルビーイングは何か」というテーマが浮かび上がる。フィンランドの教育を通過した今、私は「学生にとってのウェルビーイング」をどのような関係の中で学生とともに探せばよいのだろうか。とても大きな宿題を持ち帰ってきたように感じた。

参考：OSAO <https://www.osao.fi/en/>



コーヒータイムでふりかえる



集合写真